

平成21年 6月 7日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2005～2008  
 課題番号：17520292  
 研究課題名（和文） 中・近世悉曇資料・唐音資料を視野に入れた日本語音節構造史の研究  
 研究課題名（英文） A Study on History of Japanese Syllable Structure Considering To-in and Siddham  
 研究代表者  
 肥爪周二（HIZUME SHUJI）  
 東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授  
 研究者番号：70255032

研究成果の概要：日本語音節構造史に、音節を構成する各要素の組み合わせの拡張という観点を導入し、かつ、通常の漢字音の音形を逸脱する、唐音系字音や梵語音に十分に配慮し、より立体的に歴史を捉えることを目指した。諸種の文献調査の成果の一部として、音節バリエーションの対照表を作成した。また、日本漢字音の拗音・韻尾の組み合わせ制限は、音韻的な制限とは考えにくいことを明らかにし、古代語において音韻的に区別される三種の撥音についても、新解釈を提出した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,300,000	0	1,300,000
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,500,000	450,000	3,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：音節構造 拗音 撥音 悉曇 唐音

## 1. 研究開始当初の背景

従来の音韻史研究における音節構造の議論は、例えば、拗音の問題と、撥音・促音の問題は別途に考察されるなど、音節構造に関わる複数の事象が有機的に関連づけられることなく、それぞれ独立して研究・考察される傾向があった。しかし、音節（シラビーム）のバリエーションという観点から見ると、日本漢字音の音形においては、開拗音と前寄り韻尾（-i, -p, -t, -m, -n）が結びつきにくいという顕著な傾向、すなわち、キャイ・キャフ・キャツ・キャム・キャンなどの音形は、呉音・漢音の範囲内では原則として

存在しないという傾向がある（その唯一の例外である臻撮合口舌歯音字における、シュン・シュツ等は平安後期以降、チュン・チュツは南北朝以降に現れる、日本漢字音の歴史の中では、比較的新しく出現したものであり、それを遡れば、上記の制約には例外が存在しなかったことになる）など、音節総体を視野に入れた把握も、是非とも必要であることが知られる。この音形制約は漢字音のみにとどまるものではなく、一般の和語や擬音語・擬態語にも適用されるものであった。院政期・鎌倉時代の説話・軍記には、多彩な擬音語・擬態語が用いられ、現代語と大差がないように見えるが、それらは「ヒャウ」

「チャウ」など、漢字音の音形の枠内にとどまるものであって、「ビュン」「ガチャン」のような漢字音の枠を越えた音節を持つものは、室町時代以降にしか現れないようである。しかるに、唐音系字音（中世唐音・近世唐音）には、一般の漢字音（呉音系字音・漢音系字音）には見えない音形がごく普通に存在するし、梵語音の場合には、その音形は、すでに平安時代から、漢字音の枠を大きく逸脱していた。例を挙げると、「キャ」「ニャ」などの形は、和語はもちろん、呉音系字音・漢音系字音にも見えなかったが、梵語の音訳漢字音（般若・伽羅など）や唐音系字音（行脚・樑子など）には例があった。

以上のように、音節を総体として捉える視点と、一般的な語種の4区分（和語・漢語・外来語・オノマトペ）を越えて、伝統的に漢字音に含めて考察されることの多い、梵語音・唐音系字音（中世唐音・近世唐音）を区別して分析する視点が、日本語音節構造史に必要とされる。

## 2. 研究の目的

中世・近世の悉曇資料・唐音資料（中世唐音・近世唐音）・和語資料・擬音語擬態語資料のそれぞれにおける音節バリエーションを収集整理し、考察を加えることにより、立体的な日本語音節構造史・音節バリエーション拡張史を構築することを目指す。

日本語の音節のバリエーションが拡張してゆく具体的な経過を、中国語音韻体系・音韻史や朝鮮漢字音にも十分に注意を払いつつ、一般和語の音形・擬音語擬態語の音形・漢字音（呉音系字音・漢音系字音）の形・梵語音の形・唐音系字音の形、それぞれの相克・絡み合いの歴史として描くことを目指し、日本語音節構造史の新しい視点を提唱するものである。

## 3. 研究の方法

### (1) 各種資料からの具体的データの収集

#### 悉曇資料からのデータの収集

各地の寺社・博物館・大学等に所蔵される悉曇章（数万字から成る梵字の字母表）およびそれに準じる資料（安然『悉曇蔵』・明覚『梵字形音義』など、悉曇章を含む日本悉曇学文献）から梵字に付された仮名の付音・声点を採集・整理する。手許にある資料に関しては、すぐにも整理・データベース化が可能である。しかし、新しい資料を探索する場合、日本の学僧による悉曇学書は、『国書総目録』『古典籍総合目録』等により、かなりの点数について所在の検索が比較的容易であるが、悉曇章など梵字文献は、日本人の著作とも中国人の著作とも見なされないため、国書目録・漢籍目録から排除されるのが一般的である。比較的閲覧が容易な公共図書館・大学附属図書館に所蔵されている場

合も、それが存在していること自体が、目録による検索では突き止めにくいことが多いという難がある。特に中世以降の資料は、相対的に貴重度が低いため、善本書目等に紹介されていることにより、その存在が明らかになるということも期待しにくい。悉曇資料からのデータ収集と並行して、どこにどのような文献が現存しているのかを、すこしずつでも明らかにしておくところから始める必要がある（そのためには図書館現地でカード目録を検索する等の手段を取ることになる）。

#### 音訳漢字音についてのデータの収集

梵語音訳漢字（音訳語）は、あらゆる仏典に見られるものであり、音訳漢字音のデータも、仏書訓点資料の字音加点として多量に現存している。一般に、音訳漢字音は一般の漢字音（呉音系字音・漢音系字音）とは異なる音形を持つことも多く、音節バリエーションにも相違する点があるので、区別して体系を整理する必要がある（このことによって、呉音系字音・漢音系字音の音節体系も、より純粋な形で捉えることが可能になる）。しかし、これについて網羅的な調査・整理を行うことは、事実上不可能であるので、(ア) 仏教語辞典等を利用し、日常生活で普通に用いられる（用いられていた）梵語音訳語で、呉音系字音・漢音系字音の音形からはずれる字音を含むものリストアップ、(イ) 『金剛界儀軌』等、陀羅尼を多く含む文献において、漢字音訳陀羅尼に付された仮名音注を収集・整理する、という方法を取ることで、音訳漢字音における音節バリエーションの全体像の見通しを立てる。

#### 唐音資料（中世唐音・近世唐音）からのデータの収集

『首楞嚴經義疏注経』（寛永九年版）『首楞嚴義海』（明暦四年版）『禅林課誦』（寛文二年版）などに見える「首楞嚴神呪」には、曹洞宗・臨済宗・黄檗宗の、禅宗各宗派において、中世から近世にかけて用いられた唐音の付音が見える。同一の資料に中世唐音と近世唐音の付音例が見え、中世唐音と近世唐音の差異を直接対照できる、きわめて恵まれた資料である。手許にある資料については、ただちに入力・対照表の作成に取りかかることができる。これにくわえて、「首楞嚴神呪」について、より資料性の高い古写本や、室町時代の五山版のうち書入れの存するものの探索を進めてゆく。

#### 一般の漢字音資料からのデータの収集

唐音系字音以外の日本漢字音に関しては、呉音系字音・漢音系字音ともに、研究の蓄積が十分にあり、従来指摘されていない未知の音形を持った字音を指摘できる可能性は、限りなく小さい。漢字音研究そのものは研究代表者のライフワークでもあるので、本研究課題との関連において、臻撮合口舌齒音字の音形（前出のシュン・シュツ・チュン・チュツの類）の変遷等、関連する事象について、特に注意を払って資料

を収集する。

文学作品・抄物等の一般資料からの、擬音語・擬態語および一般和語についてのデータの収集

擬音語・擬態語研究は、日本語史研究において一つの確立されたジャンルであって、軍記・説話などの文学作品や明恵聞書類・抄物における実例がについて、ある程度まとまった報告が存在する。鎌倉・室町時代の擬音語・擬態語については、それらのデータを援用し、また、江戸時代の擬音語・擬態語に関しては、索引が公刊されているもの、テキストデータが公開されているものを中心に、音節バリエーションの観点から、整理する(音節バリエーションを整理する枠組みは、すでに確立済みであるので、検索はある程度機械的な作業によっても可能である)また、一般の和語(「ひよんな」「ちゃんと」「ちよいと」の類)については、音節バリエーションの観点からは、ほとんど歴史的研究が進んでいないので、ゼロに近いところからの出発となる。ただし、文字列からの検索はそれほど困難ではない。

(2) 収集したデータを整理する方法の検討

(1) によって収集したデータを、語種(梵語音・梵語音訳漢字音・一般漢字音・中世唐音・近世唐音・擬音語擬態語・和語)ごとの差異、時代による変遷などを容易に対照できるように、電子データ化をする。将来にわたってデータの追加等が容易にできるように、形式の検討を慎重に行う。この整理のための形式は、具体的なデータの収集の成果をフィードバックさせる形で、随時修正していくことになる。

(3) 中国漢字音・朝鮮漢字音との照合

日本漢字音の音形においては、開拗音と前寄り韻尾(-i, -p, -t, -m, -n)が結びつきにくいという顕著な傾向があることに関しては、音節バリエーションの偏在が、中国語側の事情によるものなのか、日本語に受容する際に生じたものであるのかを、きちんと見極める必要がある。たとえば、ア段拗音単独の字音(零韻尾のもの)が、事実上シャ・ジャのみであり、例外が前述の梵語音訳漢字音・唐音系字音と、いわゆる慣用音(茶チャ)に限定されるのは中国語側の事情によるもの、ウ段拗音単独の字音が、事実上シュ・ジュのみであるのは、日本語に受け容れる際に生じた偏りであることは、音節バリエーションの偏在を語学的に解釈する上で、欠かすことのできない情報であり、このことは研究代表者の過去の研究によって、すでに明らかにされている。唐音系字音(中世唐音・近世唐音)においても存在することが予想される音節バリエーションの偏在についても、中国語音韻史を確実に捉えた上での分析を進める。

#### 4. 研究成果

(1) 文献調査

本科学研究費補助金を利用して、近畿地方の寺社・博物館において、文献調査を行った。主要なものは以下の通り。

京都・東寺において閲覧させていただいた『摩多体文清濁記』一帖(第二〇二函四号)は、『悉曇字記』の音訳漢字、あるいは、それに対する反切注の漢字を列挙し、それぞれについて、声調・韻目・五音・清濁・広韻反切・玉篇反切の順序で挙げた著作であり、等韻学(具体的には『韻鏡』)が本格的に悉曇学へと移入された『悉曇字記創学鈔』の音注形式と一致し、強い関連を推測させるものであった。しかし『清濁記』には奥書が存しないため、『創学鈔』との先後関係は明らかではなかった。そこで、引き続き、『創学鈔』の素材となったことが明らかになっている、『悉曇綱要抄』『字記勘註』の調査を重点的に行った。

『悉曇綱要抄』(第二一〇函一)には、関連する記述は見いだせなかった。『字記勘註』(第二〇八函四号および六号)は、同題ではあるが、内容はかなり異なるものであり、六号の方が『創学鈔』の直接的な素材であるとされる。四号と六号の先後関係は不明とされる。六号には、『広韻』『玉篇』からの引用があり、反切・声調・韻目の注記もあるが、『韻鏡』からの引用と積極的に解せる記述は見いだせなかった。四号には、「韻鏡云宮 平声東韻牙声清音 商 平 陽 齒 清 角 入声覺 牙 清 徵 上 止 舌 清 羽 上 虞 喉 清濁」のように、『韻鏡』からの引用であることを明示した上で声調・韻目・五音・清濁をあげた箇所があるほか、「曷 入声曷韻喉声濁音 胡葛反玉云(略)何葛反、喝 入声曷 許葛反、去声夫?」のように『清濁記』『創学鈔』と共通の「被注字・声調・韻目・五音・清濁・広韻反切・玉篇反切」の形式の音注が見いだされた。つまり、この形式の音注は、組織的な運用は未だしいものの、泉宝にまで遡るものであることが明らかになった。

同じく、京都・東寺蔵『金剛頂蓮華部心儀軌』(第二〇九函四号)は平安時代天喜五年の加點本である。ヲコト点(宝幢院点)により陀羅尼の音を加點した箇所が多く、抄出作業を行った。

同じく、京都・東寺蔵『胎藏念誦次第』一帖(第二七八箱一一号)の調査を行った。この文献は、保安五年(1128)の加點であり、真言の特殊な読み癖が多く見出される、早い資料として貴重である。「怛麼(二合)マン 南」「夜 ヤム 弭(濁)」「囉 ラン 儻(濁)タ」「茶 タン 多」「戍 シユン 駄(濁)」のように鼻音韻尾が挿入される例、「瑟 シユン 拏(濁)タ」「末 マン 駄(濁)那 ナウ」のように入声韻尾が鼻音韻尾に交替する例、「輸 シユチ 睇 テイ」のように入声韻尾が挿入される例などが見出される。「驕 ケウ 答 タム 摩

仙」「枳 キン 那 ナ 囉」「三摩 マン 哆 (濁)」などは、それぞれ「嬌坦麼 (Gautama)」「緊那羅 (kinnara)」「三曼多 (samanta)」のような、別の音訳文字列(同語・別語によらず)の読みの混入などの可能性もあり、更にデータの収集・整理が必要である。

同じく、京都・東寺蔵『大毘盧遮那広大成就儀軌 下』一巻(第二九箱一号)の調査を行った。この資料は、康平二年(1059)・延久二年(1070)の加点であり、梵語 r に対するヲト点(西墓点)の使用等、独特な事象が散見される資料である。

奈良国立博物館において、安然『悉曇藏』の調査を行った。近年の新出資料である同書は、院政期・鎌倉期・江戸期の書写本からなる取り合わせ本であるが、本研究において最も重要な意味を持つ巻八の悉曇章の部分は、院政期の書写であり、同時期の豊富な加点がある。この部分の梵字への仮名注音・差声の分析を進めたものは、現在、投稿準備中である。

## (2) データの入力作業

### 唐音陀羅尼の対照表作成

同一の陀羅尼(首楞嚴經の陀羅尼)に唐音による仮名の付音がある資料として、『首楞嚴經義疏注経』(寛永九年版)『首楞嚴義海』(明暦四年版)などの中世唐音資料3点、『禅林課誦』(寛文二年版)などの近世唐音資料2点について、エクセルによる対照表の作成を進めた(継続中)。

唐音(中世唐音・近世唐音)・梵語音の音節バリエーション対照表の作成

で整理した5点の唐音陀羅尼の資料に加え、中世唐音資料として『聚分韻略』『小叢林略清規』、近世唐音資料として『磨光韻鏡』『觀世音菩薩普門品』等の通常の唐音資料、さらに、東寺蔵『悉曇章』平安初期点、六地藏寺蔵『梵字形音義』院政期点などの梵語音資料を使用して、エクセルにより対照表の作成を進めた(継続中)。

## (3) 資料のデジタル化作業

縁あって入手することができた、悉曇関係古典籍のネガフィルムのデジタル化作業を、業者(古文書複製社)に依頼して進め、CD-ROM約20枚分のデジタル画像化が終了した。貴重なネガフィルムの劣化によって、収集された資料の参照ができなくなるのを防ぐとともに、これらの資料の今後の研究に活用させるための準備を整えることができた。

## (4) 日本漢字音に於ける拗音と韻尾の共起制限についての理論的考察

日本漢字音(呉音系字音・漢音系字音)には、以下のような拗音の分布制限があることが知られている。

シャ・ジャ以外の単独ア段拗音は原則として

ない。例外：唐音「脚キヤ」、梵語音訳「若ニヤ」、慣用音「茶チャ」等。

シュ・ジュ以外のウ段拗音は長く伸ばすのが原則。

ヒュ・ビュ・ミュは長く伸ばすものも稀。

ヒョ・ビョ・ミョは長く伸ばすもののみ。

「拗音+撥音」の形はシュン・ジュンのみ。

「拗音+ツ」の形はシュツ・ジュツのみ。

「拗音+イ」の形はない。

は中国語の側に原因があり、は主に日本語の側の受け入れ方に原因があり、は双方の事情が組み合わさったものである。は、

「拗音と前寄韻尾(m, n, p, t, i)が結び付きにくい」と一括して表現することができるが、中国側(中古音)には、拗介音と前寄韻尾との間に、特に組み合わせの制限はなく、朝鮮漢字音でも、嫌・倫・獮・決・計などの例があるので、日本漢字音独自の問題であると考えられてきたようである。

しかし、朝鮮漢字音を詳しく検討すると、この問題に関しては、日本漢字音と通じ合う性質を持っていることが判明する。中国中古音で「拗介音+非前舌主母音+前寄韻尾」となるものは、いわゆるC類韻母に相当するので、朝鮮漢字音には拗介音が反映しないのが原則である。日本呉音も同様の性質を持っている。日本漢音については、唇音声母の場合は、軽唇音化に際しての介音脱落、その他は、音節全体が前舌性を帯びた結果、イ段・エ段音の音形で対応するため、拗音は現れない。一方、朝鮮漢字音で拗音(ㄲㅇの類を仮に呼ぶ)が現れるのは、むしろ中国語側(唐代音)に前舌主母音e・が推定されているもので、多くㄲで対応している。ただし、蒙古語・日本語などの前舌母音e・をハンゲルで写す際にもㄲ等を用いることがあるので、必ずしも中国語の拗介音の反映ではない可能性もある。また、臻撰諄韻字にㄲが現れるのが異例であるが、この韻は日本漢字音でもシュン・シュツ等が現れる特殊性のある韻である。つまり、拗音と前寄韻尾の分布の制限は、日本漢字音と朝鮮漢字音とに対応関係のある問題であり、それは、拗音と前寄韻尾の共起制限というような、音韻論的な制限としては括れないものである。日本漢字音における、拗音と前寄韻尾の共起制限は、中国語側の音節分布の偏りが偶然にもたらした、見かけ上の偏りである可能性が高いことが明らかになった。

詳細は、「日本漢字音における拗音・韻尾の共起制限」として、東京大学・高麗大学国際学術発表大会において研究発表をした(学会発表)。現在、投稿準備中である。

## (5) 撥音史についての理論的考察

収集したデータを利用して、撥音史についても、理論的な考察を進めた。国語音の撥音の歴史について新解釈を提案することにより、漢字音の鼻音韻尾の日本語音韻史上の位置づけにつ

いても、見直しが必要であることを主張した。その成果は、「撥音史素描」（訓点語学会研究発表・学会発表、および雑誌論文『訓点語と訓点資料』120 輯・雑誌論文）にまとめた。ただし、当該論文の内容は、修正・発展させる必要がある部分が残されており、現在準備中の別の論文において、それを修正したものを提示する予定である。

従来の研究では、平安時代の、m音便（ミ・ビ等から変化したもの）の撥音と、n音便（ニ・リ等から変化したもの）の撥音とは、それぞれ固有の音価 [-m] [-n] を有し、音韻論的に対等な関係にあると考えられてきた。しかし、後続音に関する制限の差や、語末位置への出現の可否、促音便との平行性、上代語との連続性などを考慮すると、n音便の撥音は、後続音節が舌音の場合に当該変化が起こりやすかっただけで、必ずしも音声的に [-n] に固定されているのではなく、後続音節（鼻音・濁音に限定される）に対する待機音と考えるべき事を主張した（用語としては「量的撥音便」を提唱した）。また、「ウ」で表記される第三の撥音についても、それを音韻的に区別されるものとして想定する必要性を認めつつも、推量の助動詞「う」「らう」や、漢字音 ng 韻尾の鼻音性消失時期、オノマトベにおける撥音「ン」の普及時期等との兼ね合いから、バ行・マ行四段動詞のウ音便形に関しては、鎌倉時代には、鼻音音素/-ŋ/、室町時代には口音音素/-w/と解釈すべきことを主張し、室町期のウ音便形と近世以降の撥音便形とは、直接連続するものではなく、音形の交替として捉えるべきことを主張した。

## 5. 主な発表論文等（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 8 件)

肥爪周二、「拗音の分布からあぶり出す日本語音韻史」、『文化交流研究』第 22 号、査読無、2009、37～41

肥爪周二、「撥音史素描」、『訓点語と訓点資料』第一二〇輯、査読有、2008、12～27

肥爪周二、「音韻」、『国語と国文学』第八十四巻第五号、査読無、2007、188～195

肥爪周二、「閉鎖と鼻音」、『日本語学論集』第三号、査読無、2007、23～44

<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/handle/2261/9797>

肥爪周二、「金田一春彦」、『日本語音韻の研究』、『日本語学』第二十六巻第五号、査読無、2007、92～94

肥爪周二、「書評 馬淵和夫著『悉曇章の研究』」、『日本語の研究』第 3 巻 3 号、査読無、2007、1～6

<http://www.joao-roiz.jp/SJL/text/3805:38cf254c9881972341dc146fa47cf9871d29bb37>

肥爪周二、「濁音標示・喉内鼻音韻尾標示の相関 観智院本類聚名義抄を中心に」、『訓点語と訓点資料』第一一六輯、査読有、2006、52～70

肥爪周二、「音韻史 拗音をめぐって」、『国文学 解釈と教材の研究』日本語の最前線、査読無、2005、52～60

〔学会発表〕(計 3 件)

肥爪周二、「日本漢字音における拗音・韻尾の共起制限」、東京大学・高麗大学国際学術発表大会、2008.2.19、東京大学

肥爪周二、「撥音史素描」、訓点語学会、2007.10.14、東京大学

肥爪周二、「濁音・喉内鼻音韻尾の標示レベルの相対的關係」、訓点語学会、2005.11.11、東北大学

〔図書〕(計 1 件)

肥爪周二、朝倉書店、『朝倉日本語講座 2 文字・書記』、「唐音系字音」2005、200～212

〔その他〕

肥爪周二、「八行音・バ行音・パ行音」「ヤ行音」「ワ行音」、『日本語学研究事典』、明治書院、2007

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

肥爪周二 (HIZUME SHUJI)

東京大学大学院人文社会系研究科、准教授、研究者番号：70255032

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし